音楽の全てが聴覚に流れ込む“アイソダイナミック”スピーカーが日本に初上陸

Profile ┆ フランス発。いま世界中のオーディオファンが注目する平面型スピーカーメーカーを手掛けるDIPTYQUE AUDIO（ディプティック・オーディオ）が日本に上陸を果たした。2010年にジル・ドゥジエッシュ氏とエリック・ポワ氏により設立された同ブランドが手掛けるのはアイソダイナミック平面スピーカーというもの。オリジナル技術であるPPBM（プッシュ・プル・バイポーラ・マグネット）等をベースに、視覚と聴覚の両面で感動を提供するためのスピーカー作りを行っている。フランス南西部。モントーバンの自社工房にて一貫生産されているという同スピーカー。今年発売された最新「DP 160 MKII」から日本に上陸を果たしている。その実力はいかに?本誌試聴室にて石原 俊氏がその音を体験する。

Text by
石原 俊
Shun Ishihara

Photo by **田代法生**

DIPTYQUE AUDIO
DP 160 MK Ⅱ

スピーカーシステム

※写真のカラーはブラックでレザーカラーはチョコレート色

BEST HiFi Components
2024 AUTUMN

Specifications

●タイプ:ダイポール／2ウェイ●感度:87db／1W／1m／2.83V●インピーダンス:6Ω●クロスオーバ:1600Hz●帯域幅:30〜22000Hz●許容入力:200W（推奨アンプ60W以上）●サイズ:530W×47D×1,610Hmm●質量:50kg●取り扱い:シーエスフィールド（株）

リボンと磁力型のハイブリッド 使いやすさも追求した平面型

　フランスから新着したディプティック・オーディオのスピーカー、DP160MKⅡをご紹介しよう。同社の創業は2010年。2010年代の半ばころからヨーロッパのショウに出品するようになり、その音質が多くの業界関係者に評価されるようになった。ディプティック＝DIPTYQUEは古フランス語で「一対の屏風絵」という意味なのだそうだ。なるほど。写真でもお分かりのように、平面型の本機は屏風を思わせる。

　平面型スピーカーにはいくつかの種類があって、静電型、リボン型、磁力型などに分類される。本機はどれに属するかというと、大雑把にいってリボン型と磁力型のハイブリッドということになるのだろう。これは音もさることながらユーザーの使い勝手に配慮した選択ではなかろうか。静電型を採用しなかったのは、振動膜に電圧をかけるための電源ケーブルの存在が邪魔だったからだと推測できる。オールリボン型としなかったのは極端な低能率と低インピーダンスを嫌ったからと推測できよう。

DIPTYQUE AUDIO
DP 160 MK Ⅱ

どう耳を凝らしても音像のニジミを発見できない平面型機の良さをかき集めてきたようなサウンド

低域を磁力型とし、高域をリボン型としたのは平面型スピーカーとしてかなりユーザーフレンドリーということになる。

磁力型の低域ユニットと高域は超大型のリボン型

磁力型の低域ドライバーユニットの製造技術を同社ではプッシュ・プル・バイポーラ・マグネットと称している。これは振動膜の前後に2極のマグネットを配しているのが特徴で、振動膜のコイル（アルミテープ）を完全な制御下に置くことができるという。写真からも推測できるように、低域のユニットは2基で、どちらも等価に動作し、クロスオーバーのような処理はしていない。リボン型の高域ドライバーユニットは全長55cmとかなりの大型だ。低域とは1600Hzで急峻ではなくゆるやかにクロスしている。

スチールとMDFのハイブリッド美しさも追求したキャビネット

ダイナミック型スピーカーだとエンクロージャーに相当するフレームは、スチールとMDFのハイブリッド構造で、フェルトによる制振処理がなされている。フレームの支持点は3所。トゥイーター側に本体と直角に交わる脚部がマウントされており、ウーファー側の下部にスパイクが取り付けられている。入力端子はシングルワイアリング対応だが、オプションでバイワイアリングに対応するとアナウンスされている。フレームのカラーはブラックとホワイトのみだが、外縁部にあしらわれたレザーは4色から選ぶことができる。さらにはオプションでフレームのカラーを155色から選択することもできるという。

平面型機の良さを全て備え情報量と聴きやすさを両立

試聴にはフレームがブラックでレザーがチョコレートの個体を供した。メーカーは後方の壁との距離を少なくとも80cmはとるように指示しているので、大事を取って約2m離してセッティングした。ラージサイズの平面型機でしばしば問題になる設置の不安定さは全く感じられない。本誌試聴室は約15畳で決して広大とは言えないが、それでも圧迫感はなく心平らかに聴いていられる。

平面型機の良さをかき集めてきたようなサウンドである。まずは鮮度が高い。帯域の制限感や情報の劣化感が微塵もなく、ディスクに記録された音が何の損失もなく再生されているような印象なのだ。第二に情報量と聴きやすさの両立である。情報量は多くても聴くのに労力を必要とするスピーカーも存在するが、本機はとりたてて集中力を高めずとも音楽の全てが聴覚に自然に流れ込んでくる。

エンクロージャーという「必要悪」をもつダイナミック型機のような音の回折感は皆無。どう耳を凝らしても音像のニジミを発見することはできない。もちろんワイドレンジである。エネルギーバランスはすらりとした摩天楼型で、高域は可聴帯域外まで自然に伸び、低域にはクセのようなものがなく、ボトムエンドまでの深々とした伸びを聴かせてくれる。音楽的には平面型らしく中立的で、平面型の対極に位置づけられる旧時代のホーン型機のように楽曲・演奏に介入することはない。しかしながら冷たいというわけではなく、ある種の暖かみのようなものすら感じられる瞬間がある。

大型のリボントゥイーターを擁してはいるが、オールリボン型機のようにパワーアンプに過剰な負担を強いることはない。静電型機のように給電する必要もないので、給電方法で音が変わるということはなく、安心して音を追い込む作業に邁進できる。

クラシックのオケものでは実力が最大限に活かされる

ジャズは金管楽器の質感がすばらしい。モダンジャズで生じがちな音像の膨満感は皆無。よく締まったトランペットやサックスのソロが試聴室の空間にキリリと浮かび上がる。試聴はCDで行っているのだが、まるで超高級レコードプレーヤーでジャズをかけているかのよう。スピーカーの後方にも同じ音が出ているわけだが、空気感の表現は的確で、ハイハットの開閉が見えるかのよう。

ヴォーカルの音像はスピーカーの後方に定位するので歌手との距離は遠いが、清潔な音場に清楚な声が浮かび上がるハイエンド表現は非常に魅力的だ。トータル的にクセがないので発音の聴き取りやすさも好ましい。

クラシックのオケものは本機の解像度と聴きやすさが最大限に活かされる。スコアが見えるかのように緻密で情報量が多いのだ。確かにダイナミック型のような「かぶりつき」ではなく音像・音場にはある程度の距離があるのだが、その距離感がリアルなサウンドステージを構築している。

本機は決して安いものではないが、この情報量と聴き味をわが物にできると思えば決して高くはないと思う。ぜひとも試聴する機会を作っていただきたい。

「DP 160 MKⅡ」のメインのボディカラーはブラックとホワイトの2色を用意

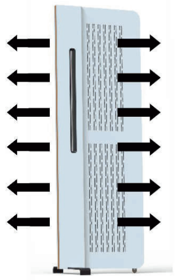
「DP 160 MKⅡ」の高い質感を確認する筆者

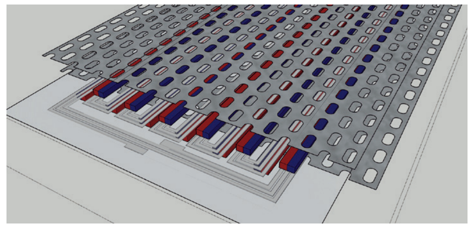
本誌試聴室にて「DP 160 MKⅡ」を設置。メーカーは後方の壁との距離を少なくとも80cmはとるように推奨している

Details

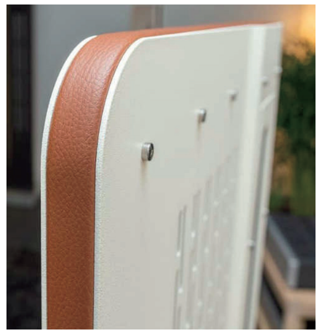
低域に採用されたPPBM（プッシュ・プル・バイポーラ・マグネット）。仕様に基づいて製造された大きな断面のバイポーラ・マグネットを振動膜の前後に配置。振動膜のコイル（アルミテープ）を完全な制御下に置くことができる

ディプティック・オーディオの創業者であるジル・ドゥジエッシュ氏（左）とエリック・ポワ氏（右）


スピーカーの両側でダイポール動作を行うことで、コンサートの空間性が再現できる


リボントゥイーターはベースパネルと同様に、リボンはアイソダイナミック・セル（マイラーフィルムとアルミコイル）で製造。ネオジム磁石から作られた強力な磁場の中で駆動する

入力端子はシングルワイアリング対応。オプションでバイワイアリングへの対応も可能


外縁部のレザーは4色（ブラック、ホワイト、キャラメル、チョコレート）から選択できる。フレームはオプションで155色からの選択することもできる

モントーバン（フランス）の工房で一貫生産。デジタル制御による溶解、スタンピング、金属部位の溶接、メンブレンや回路の製造など、生産ライン全体を管理